

近世東北の「家」と墓

岩手県前沢町大室鈴木家の墓標と過去帳

関口慶久

Ie and Graves in Early Modern Tohoku

はじめに

- ① 大室鈴木家の来歴
- ② 発掘調査と墓標調査の経過
- ③ 墓標調査の成果
- ④ 過去帳調査
- ⑤ 大室鈴木家の「家」と墓
おわりに

[論文構成]

本稿は、これまで民俗学的手法によつて研究が行われてきた近世の「家」というテーマに対し、考古資料を主軸とした分析によつてどこまで肉迫できるのかを、仙台領伊達藩における豪農であつた大室鈴木家（現岩手県前沢町）に関わる歴史資料をモデルとして、模索しようとする試みである。

筆者は大室鈴木家墓地の墓標調査と鈴木家所蔵の「大室鈴木家過去帳」の調査を行い、墓制関連資料を中心とした分析を行つた。

まず墓標調査の成果としては、大室鈴木家墓地における墓標造立数の変遷は、一九世紀前後と一九世紀第2四半期にピークが認められ、形式の変遷は、一八世紀後半にC類（割石形）→B（円礫形）・C・D類（頭部カマボコ形）への変化が認められた。つぎに墓標と過去帳の双方の分析では、天明期以後、宗家である大室鈴木家の過去帳には記載されていない死者の墓標が、鈴木家墓地に次々と造立され、反対に、天明以前は過去帳に記載されながら、墓標を造立されなかつた家族が多く存在したことが

判明した。すなわち大室鈴木家の墓標造立は、天明期以後、鈴木家当主の近親以外の者にも、広くなされていたのである。

このような墓標造立数と墓標形式・被造立者層の変遷の時期差は、墓標造立数の増減が災害などの広汎な範囲での変化に関わつており、また近世から近代の大きくなつねりのなかで理解しなければいけないことを物語つてゐる。そして墓標形式や造立者層の変化は、「家」の変化に呼応していることが判明した。このことは鈴木家の来歴および大室鈴木家の旧屋敷跡における二次にわたる発掘調査成果からも肯定できるものである。

以上の分析結果は、墓標それ自体の評価にとどまるわけではなく、墓標から読み取ることのできるデータを材料とした「家」そして地域社会の動向を窺うための基礎的解釈として位置づけることができるであろう。